滋賀医科大学看護学ジャーナル,4(1),67-71

安楽性と快適性の共通点・相違点

－看護技術における安楽性と日常生活の中の快適性から－

林　静子
基礎看護学講座

要旨

看護学において看護技術の「安楽性」を生理的指標から測定する研究が増加し、工学・建築学では、日常生活の中の「快適性」を測定する研究が行なわれている。「安楽性」と「快適性」の共通点・相違点を明らかにすることにより、「安楽性」をもたらす看護技術の根拠・科学的裏付けを示す際、工学・建築学で使用している「快適性」の指標をさらに取り入れることが可能となるのではないだろうか。そこで、「安楽性」と「快適性」について説明している文献を比較し共通点・相違点を明確にすることを目的とした。結果、1）どちらも人間を対象とし、人間を取り巻く全体または具体的な現象を捉えている。2）「快適性」は消極的・積極的の2側面から状況を捉えているが、「安楽性」は広く抽象的に現象を捉えている。3）両者とも基本的欲求を満たした上でのプラスαの状態を示している。4）関連する要因として環境の調整は共通しているが「安楽性」は人の介入が要因にあげられ「快適性」では物の介入が要因としてあげられている。5）「安楽性」「快適性」が扱う対象者の状態が異なっている。今後、状況の応じた定義を検討する事、工学・建築学で行なわれている「快適性」の測定指標を看護学における「安楽性」を測定する手法として取り入れることが課題となる。

キーワード：安楽性，快適性、看護技術

Ⅰ　はじめに

根拠のある看護技術、科学的裏付けのある看護技術の提供が強く求められており、根拠・科学的裏付けを示すために主観的な指標と生理学的指標から看護技術の目的となる「安楽性」を測定するといった研究が増加している。しかし、現在の行なわれている生理学的指標の測定手法や技術は検討事項が多い。工学・建築学などの分野では日常生活の中に快適性を提供するため、製品開発や環境調整等の際に「快適性」の視点から研究しているものが多く見られる。看護学と工学・建築学といった対象をみる視点の違いはあるものの、一般的に「comfort」や「comfortable」の日本語訳として「安楽性」や「快適性」があげられており共通点があることが分かる。

しかし、ターミナルステージの患者に対して快適な状況はイメージすることが難しい[1]快適な部屋と安楽な部屋では見方が変わる[2]というように「安楽性」と「快適性」は異なる状況である事を示している。

これまで「安楽性」「快適性」の両者とも主観的な感情で抽象的であり状況により意味が変化するため、研究者によって様々な議論がなされており一般化した定義はされていない。

「安楽性」と「快適性」の共通点・相違点を明らかにすることにより、「安楽性」をもたらす看護技術の根拠・科学的裏付けを示す際、工学・建築学で使用している「快適性」の指標を使うことができるのではないだろうか。そこで、「安楽性」と「快適性」について説明している文献を比較し共通点・相違点を明確にすることを目的とする。

Ⅱ　方法

医学中央雑誌 web 版（1983～2005 年）より「安楽」「安楽性」・「快適」「快適性」をキーワードにし、「安楽」「安楽性」について定義、説明されている 9 つの文献、「快適」「快適性」について定義、説明されている 9 つの文献を対象とした。

文献に記載されている、定義・種類・状態・要因を抜粋し比較検討を行なった。

Ⅲ　結果

「安楽性」「快適性」に関して説明されている文献から定義・種類・状態・要因を比較したものを表に示す。（表１）

１）安楽性・快適性の定義

安楽について広辞苑では、「心身に苦痛がなく楽々としていること」[3]と、記されている。看護実践場面に焦点をあて「安楽」という用語の概念分析を行った結果では、

表１　安楽性・快適性の説明内容

		キーワード／文献No.	安楽・安楽性	キーワード／文献No.	快適・快適性
定義		3)広辞苑	・心身に苦痛がなく楽々としていること	3)広辞苑	・具合が良くて気持ちのよいこと
定義	広義	4)川島（1997）	・患者がより人間らしくあると言う意味	6)栗山（1993） 7)栗山（1996）	・人間欲求の充足されていることが自覚される状態
定義	広義			8)鈴木（2005）	・安全性、経済性に関わる要因などを含めたサービスや商品全体の品質に対する満足・不満足感
定義	狭義	4)川島（1997）	・苦痛や不快や不安の軽減	7)栗山（1996）	・光、音、振動、温熱など人を取り巻く環境内の各種刺激要因が目、耳、皮膚などの感覚器を通して作用しその結果として近くされる満足感、不満足感
定義	狭義	5)佐居（2004）	・患者が人間らしいその人らしい日常生活を過ごせる状態像で具体的には危険のない状態。気持ちいい、心地いい等の快適さ、家族が辛いと思わない。		
種類				8)鈴木（2005）	適（neutral）：不快な刺激がない状態 快（pleasantness）：より積極的な対処を行なう
種類				9)宮崎（2002）	消極的快適さ（comfort）：安全性や健康の維持（欠乏欲求） 積極的快適さ（pleasantness）：過度な刺激によってもたらされる成長欲求
状態		4)川島（1997）	出来るだけ生理的に平衡な状態 心身、環境の変化をもたらす事 日常生活の中で選択する事	2)渡辺（1995）	具合がよく気持ちよくすごす事が出来る
状態				7)栗山（1996）	快適さは環境の状態を感覚で捉えた結果を反映している。
状態		2)渡辺（1995）	心身になんら苦痛を感じることなく楽々した気分	11）安河内（2001）	やる気や意欲をもって生き甲斐のある人生を送れる状態
状態		5)佐居（2004）	危険がない、人間らしい生活、その人らしい、日常生活をすごせる事、気持ちいい、楽、快適、精神的・身体的に苦痛がない、安楽な体位、家族がつらいと思わない	8)鈴木（2005）	知覚過程の変化
状態		10）佐藤（1998）	より快適な状況であること 苦痛のない事、個人の成長を促す事 癒されている状態、平和で満たされている事 安らいだ感じ、不安を取り除いた状態 回復した感じ、強くなって元気づけられた状態	15)羽根(1993)	不快ではないニュートラルな状態。
状態		13）川島（1999）	変化と流動の状態		
状態		14）佐居（2005）	基本は生理的な平行の維持		
要因		5)佐居（2004）	患者に苦痛・不安等の先行するもの	11）安河内（2001）	人の生活環境への適応
要因				7）栗山（1996）	人の嗜好、価値観、文化的側面、個人差要因、使いやすさ
要因				6)鈴木（2005）	多くの人が不快と感じない範囲内に刺激強度を制御する 安全性、経済性、利便性、時間要因

患者が人間らしいその人らしい日常生活を過ごせる状態像で具体的には危険のない状態。気持ちいい、心地いい等の快適さ、家族が辛いと思わない[5]と定義している。

また、「安楽性」を広義と狭義に分け、広義の「安楽性」を患者がより人間らしくあると言う意味とし、狭義の「安楽性」を苦痛や不快や不安の軽減[4]、と定義している。

快適性は広辞苑では、具合がよくて気持ちのよいこと[3]と記されている。「快適性」における定義は広義と狭義に分け、広義の「快適性」を人間欲求の充足されていることが自覚されている状態[6]、安全性、経済性に関わる要因などを含めたサービスや商品全体の品質に対する満足・不満足感[7]とし、狭義の「快適性」を具合が良くて気持ちのよいこと[6]、光、音、振動、温熱などひとをとりまく環境内の各種刺激要因が目、耳、皮膚などの感覚器を通して作用しその結果として知覚される満足感、不満足感[7]と説明している。

「安楽性」「快適性」の種類では、「安楽性」は一つの事として示されており区別をして考えるものはみられなかった。「快適性」は、不快な刺激がない状態として適（neutral）、より積極的な対処を行なう快（pleasantness）[8]、安全性や健康の維持（欠乏欲求）を含む消極的快適さ（comfort）と、過度な刺激によってもたらされる成長欲求として積極的快適さ（pleasantness）[9]、と区別をして考えている。

2）安楽・快適な状態

「安楽性」と「快適性」を示す状態の比較を行なった。広義の安楽な状態・快適な状態はどちらも人間のある状態とし、その人らしい、より人間らしい、生き甲斐のある人生を送れる状態等、刺激により人間のQOLを高める状態・状況を示している。[5、10、11]

狭義の安楽な状態は、基本は生理的平衡を維持している上での状態、変化によって得られ一定した状態ではなく流動的・段階的な状態、気持ちいい、楽、快適、精神的・身体的に苦痛がない状態と主観的な状態等を示している。[2、4、12、13、14]

「快適性」では広義の状態を示すものは見あたらなかった。狭義の快適な状態では、基本的欲求を満たした状態として、不快でないニュートラルな状態と示し、刺激となるものを知覚し意識することによって感じられた状態のように、人が知覚・認知する感覚であると説明しているものが多く見られる。また、状況や対象の違い、個人差により様々な意味を持つ事を強調している。[2、7、8、15]

3）安楽性・快適性に関連する要因

「安楽性」「快適性」に関連する要因の比較を行なった。安楽性に関連する要因としては、対象となる患者に先行するものとして痛みの訴えや苦痛等があげられ、患者に関わる家族、患者に介入を行うものとして看護師の能力や整った環境の提供が影響要因としてあげられる。[5]

快適性に関連する要因としては、人間の身体と脳、適応能力、環境、文化的背景、安全性、経済性、商品の品質等があげられる。[7、8、11]

Ⅳ　考察

1）安楽性・快適性の比較

「安楽性」と「快適性」の定義を比較すると、どちらも人間を対象とし、その人らしく、欲求が充足された状態等、人間を取り巻く全体または具体的な状況を含めた説明がされており共通した現象を捉えている。

「快適性」の2側面と「安楽性」を比較した際、「安楽性」は不快な刺激がない状態として適（neutral）、安全性や健康の維持（欠乏欲求）を含む消極的快適さ（comfort）に含まれるように感じる。しかし、これは「安楽性」の広義に含まれる、「患者がより人間らしくあると言う意味」つまり、より人間らしくあるための積極的な「安楽性」が含まれてはいない。そのため、同義のものとは言い難い。

「安楽性」を区別して説明しているものはないが、看護場面において消極的安楽性と積極的安楽性に分けてみることは可能であると考える。患者に必要な安楽性を2つの側面からみることにより、実施する介入が明確となり、より患者にあった看護の提供が可能となるのではないだろうか。また、2つの側面から「安楽性」をみることにより、介入結果を客観的に判断することが可能となると考える。

2）安楽と快適な状態の比較

安楽な状態・快適な状態を比較すると共に基本的欲求を満たした上でプラスαの状態で変化することを示している。これは、どちらも対象をみる際に基本は生理的平衡を維持するといった、マズローが示している基本的欲求[16]を満たしている事を条件としていることが分かる。

「安楽性」を示す安楽な状態は、変化する主観的な状態としており、客観的に判断することは困難であることが示唆される。そのため、状態を判断する際にはより詳細に状態を分けて考え説明可能なものにすることが必要となる。一方、「快適性」を示す快適な状態は、刺激を知覚・認知する感覚と説明し、生体反応として取り扱うこ

とが可能な状態として位置づけている。よって、「快適性」を客観的に判断することが可能となる。

3）安楽性・快適性に関連する要因の比較

「安楽性」に関連する要因として、その対象となる患者に先行するものとして痛みや苦痛等があげられ、影響要因としてそこに介入する看護師や患者に関わる家族、環境などがあげられている。つまり、「安楽性」を感じる対象となる患者は、痛みや苦痛等により身体的もしくは精神的にマイナスの状態にある者であり、その対象者にいかに関わり、どのように環境を整えるかによって、「安楽性」が生じる事となる。

「快適性」に関連する要因は、対象となる人間に刺激となる環境・社会的要因、安全性などがあげられている。

「安楽性」と「快適性」の要因を比較すると、対象者に関わる環境が影響していることは共通している。しかし、「安楽性」では、対象に関わる看護師の介入や家族といった直接的な人の介入を要因としてあげられ、「快適性」では経済性・商品の品質等といった物的な要因があげられている。これは、人が道具となり対象に関わる看護学と、主に物によって人の生活に関わる工学・建築学の分野で使用されている言葉の比較を行なったため、明確に異なる点であるといえる。

4）「安楽性」研究の今後の課題

「安楽性」「快適性」の定義の比較において、対象者は共に人間であったが状態、関連要因の比較ではその対象の状態が異なっている事が示唆される。つまり、看護学が扱う「安楽性」の対象は患者という健康状態に障害があるものであり、工学・建築学で扱う「快適性」は、前提として基本的欲求を自らの力で満たしている者である。対象が置かれている状態が異なっているものの、それぞれ対象に快の方以降に向かうための刺激を与え「安楽性」「快適性」へと変化する幅は同様であると考える。

そのため、工学・建築学で行なわれている「快適性」の測定指標を看護学における「安楽性」の測定指標として、今後さらに取り入れていくことが可能である。しかし、工学・建築学で刺激として取り扱うものは物や商品など一定した条件を作ることが可能であるが、看護学では刺激となるものは、看護師の手を介した技術や家族であるため、一定した条件を作ることは困難である。また、時間的な変化や様々な状況・個人によって「安楽性」「快適性」は変化するため、状況や関連する要因の整理を行いパターン化し、状況に応じた「安楽性」「快適性」について広義・狭義の定義を検討する必要がある。それにより、状況に応じた技術の提供、その評価も可能となり、より対象に応じた「安楽性」「快適性」を得られる技術を提供することができると考える。

これらの内容を概念図に表した（図1）。

V結論

1）「安楽性」「快適性」のどちらも人間を対象とし、人間を取り巻く全体または具体的な現象を捉えている。
2）「快適性」は消極的・積極的の2側面から状況を捉えているが、「安楽性」は広く抽象的に現象を捉えている。
3）「安楽性」「快適性」のどちらも基本的欲求を満たした上でのプラスαの状態を示している。
4）「安楽性」「快適性」に関連する要因として環境の調整は共通しているが「安楽性」は人の介入が要因にあげられ「快適性」では物の介入が要因としてあげられている。
5）「安楽性」「快適性」が扱う対象者の状態が異なっている。
6）「快適性」の測定指標を「安楽性」の測定指標として取り入れることが可能である。

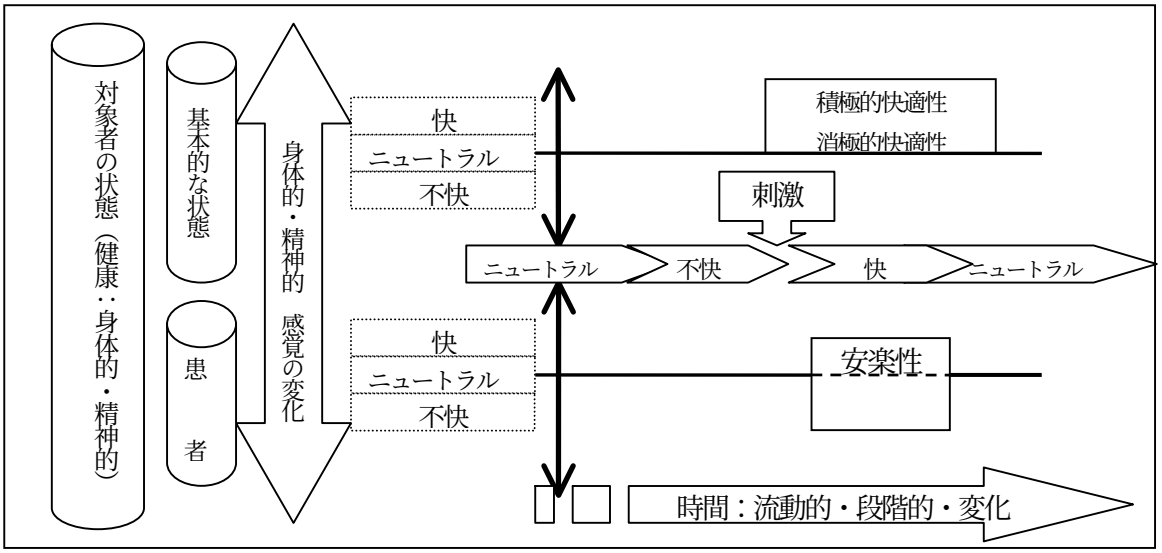

図１　安楽性と快適性の比較概念

文献

1）川島みどり：④安楽の概念. 看護実践の科学, 28 (2), 76-79，2003.

2）渡辺優：室内学入門. 53-67, 建築資料研究社，　1995.

3）広辞苑，第５版

4）川島みどり：看護技術の現在　看護の時代２．勁草書房，45-74，1997.

5）佐居由美：看護実践場面における「安楽」という用語の意味するもの．聖路加看護大学紀要，30，1-9，2004.

6）栗山洋四：ヒューマンテクノロジーの将来　－こころの問題・快適性・感性－．繊維製品消費科学誌，34，109-116，1993.

7）栗山洋四：快適な生活を創造する技術　－人間生活工学の立場から－, 繊維機械学会誌, 49 (5), 280-285, 1996.

8）鈴木浩明：人間生活工学と快適性「快適性」基本的考え方．人間生活工学，6（1），42-45，2005.

9）宮崎良文編：快適さのおはなし．11-32，日本規格協会，第１版，2002.

10）佐藤紀子：安楽：comfort について．看護技術，44（15），1605-1607，1998.

11）安河内朗：現在における快適性の考え方．訪問看護と介護，6（5），425-429，2001.

12）金井一薫：患者にとっての「安楽」とは，その本質と概念　－“comfort”という言葉をめぐって－．綜合看護，1996.

13）川島みどり：第１章　生から生活行動へ　III看護における安楽性，新訂　生活行動援助の技術　－人間として生きていくこと－. 看護の科学社, 15-21, 1999.

14）佐居由美：和文献にみる「安楽」と英文献にみる「comfort」の比較　－Roders の概念分析の方法をもちいている日米２つの看護文献レビューから－，聖路加看護大学紀要，31，2005.

15）羽根義：快適性の概念とその側面. 人間工学, 2 (2), 49-57，1993.

16）フランク・G・ゴーフル．小口忠彦（監訳）：マズローの心理学. 59-84, 産能大学出版部, 第45版, 2000.

17）川島みどり：Ⅳ 生活行動援助と安楽，川島みどり編看護技術の安楽性. 47-93, メヂカルフレンド社, 1988.

18）川島みどり：③看護職の生命観と安楽性の視点．看護実践の科学，28（1），76-79，2003.

19）安岡宣容：安楽「comfort」．臨床看護，26（8），1283，2000.

20）鈴木浩明著：快適さをはかる．1-17，日本出版サービス，第１版，2002.

21）長友宗重：人間の側から見た快適性とは．日本音響学会，50（6），480-484，1994